

鋼構造実験に60人
 鋼骨製作部会も
 広工大で

【広島】広島県鉄構工業会（理事長〓山本泰徳・マテントス社長）と日本建築学会中国支部は9日、広島工業大学（広島市）で「鋼構造実験見学会」と「第3回鉄骨製作部会」を開催、約60人が参加した。

鋼構造実験見学会では同大学工学部建築工学科の山西央助助教が「座屈補剛効果の確認と必要補剛力について

座屈波形と座屈荷重」というテーマで、試験体であるH形鋼に荷重をかけて座屈させ



実験の説明を行う山西助教

工方法等を変えて、ガスによって生じる空洞で溶接部を劣化させ破砕の原因になる「アロ―ホール」の発生状況を確認する実験を継続すると話した。

る実験を行った。一般に建築物は座屈現象が現れると部材が変形し劣化してしまうので、発生を抑制することが耐震安全上重要になっ

てくる。補剛を行った試験体とそうでない試験体の差は歴然で、補剛効果が認められた。

鉄骨製作部会では同大学工学部建築工学科の清水斉教授が「溶融亜鉛めっき高力ボルトの孔径拡大実験」と「開先防錆剤を塗布した完全溶け込み溶接におけるアローホールの発生状況に関する試験」について説明した。

亜鉛めっき高力ボルトの穴は建築基準法で穴径プラス2ミリと定められているが、実験で穴径プラス3ミリでもすべりにくさを表す値である「すべり係数」は基準値の0・5を上回る結果が出ていると述べた。

建築鉄骨工場の現場溶接で開先部に錆が発生することは、品質管理面で大きな問題となっている。開先部の加工方法等を変えて、ガスによって生じる空洞で溶接部を劣化させ破砕の原因になる「アローホール」の発生状況を確認する実験を継続すると話した。